ナツメヤシの図像と意味

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1592

ナツメヤシの図像と意味

前田 龍彦

オリエント世界には、羽根状の葉を手にした図像が多く登場する。これがナツメヤシの葉である。邦訳文では「棕櫚」と訳されていることも多いが、棕櫚の葉は扇の骨状に細長い葉が半円形をなす。葉の形状からいっても、図像に表されているのは棕櫚ではない。また、地中海沿岸の棕櫚はチャボトウジュロ(Chamaerops humilis)といい、高さは1メートルほどであるが[1]、ナツメヤシは樹高が20～30メートルにもなり、幹の頂部から長さ5メートルに達する葉を数十枚広げるヤシ科の高木である(図1)。幹は直径50センチにもなり、樹齢は80年におよぶ[2]。この圧倒的な樹容のみならず、その房をなす実が重要な栄養源であったことや、新葉がひと月に一葉ずつ生えることも、この樹が「象徴」にふさわしいものであることを示している。ナツメヤシと棕櫚とは同語(ラテン語palma、英語 palm、フランス語palme＝ヤシ科の総称)ゆえの誤訳であろう。

乾燥熱帯地域に自生するナツメヤシ(学名dactylifera)の原産はメソポタミア周域といわれており、前3000年ころには栽培がはじまっていた。後代のものであるが、ハンムラビ時代(前1700年頃)のある契約文書には、灌漑用水を利用した場合、そこに育ったナツメヤシの4分の1を毎年タシュリートゥ月(第7月：現9月末)に支払うことが定められており[3]、栽培が行われていたことを裏づけている。また、この樹がアッスールバニパルの宮殿の壁を飾っていた浮彫(前7世紀)[4]など多くの場面背景に登場していることや、ヘロドトスが「バビロン地方は・・・平野には至るところナツメヤシが生えており、その大部分は実を結び、彼らはこの実から食物や酒や蜜を作る」[5]と記していることから、古代においても、現在と同じようにオアシスや水辺にナツメヤシが群生していたことも確かである。そして古代人にとってこの樹がいかに重要であったかは、楔形文字の文書からうかがい知ることができる。粘土板には、バビロンの新年祭の時、第6日目に「頭を打ちおとし、ナブ神の前でおこされた火(？)に投げ込まれる」2体の彫像は「緋の衣をつけ、腰はナツメヤシの葉[で][締められ]る」[6]と刻まれていることや、「ゆたかな樹、[ナ]ツメヤシ(ギシンマル)よ、大事な弟よ」[7]と記されている。このように重要であったナツメヤシの樹が背景のモティーフとしてだけでなく、重要な意味を担って描かれていたのは当然といえよう。図像としては、樹木全体を表したもの、樹冠部分を意匠化したパルメット文、葉だけを表したものとがある。

1．樹木全体を表したもの

前3千年紀中頃の円筒印章に、「誘惑」と呼ばれるものがある(図2)[8]。ここには、数枚の葉を広げ、実の大きな房を左右に付けた樹が「アダムとエヴァ」の間に描かれている。その樹姿からナツメヤシと判断できる。旧約聖書「創世記」によれば、エデンの園の中央に2本の樹があり(2章9節)、1本は人類に死をもたらすことになった「善悪の知恵の樹」(2章17節)、いま1本はこの実を食べると永遠に生きるという「生命の樹」(3章22節)であるという。蛇が表されているもののその位置が傍らであることから、この印章のナツメヤシは「生命の樹」であったと思われる。マリ出土の「王権神授」場面を表した壁画(前18世紀、ルーヴル美術館蔵)[9]では、画面中央の王権神授場面の下段に湧水の壺を手にした二女神が描かれており、壺の口にはナツメヤシの葉がたてられている。湧水の壺は鮮水の神エアや水の女神グーラに通じるものであり、再生に関わる[10]。上段で王権を授けている女神イシュタルは地母神であり、

豊穣性と関わるのはむろんであるが、太陽が力を弱めはじめてから復活に至る夏至から冬至までの期間(冥界にあたる)を司るがゆえに死と再生にも関わる。おそらくここでのナツメヤシは「生命の樹」として不死生・多産を表わし、さらに王権とも関連して、王権の永劫・繁栄を意味したと考えられる。この主題の左右両端にも写実的なナツメヤシの樹が描かれている。やはり大きな実の房をつけているが、ここには収穫のために木に登る人々がいる。この場面は神、王の恩恵による豊穣を象徴しているともいえる[11]。地母神とナツメヤシとの関わりは強く、前1千年紀初頭の「イシュタル女神崇拝」を表す円筒印章(図3)[12]でも、場面の両端に枠のようにナツメヤシの樹が描かれている。また、ナツメヤシはパレスティナの地母神アスタルテの住居たる「生命の樹」であり、この女神のヘブライ語名タマルはナツメヤシを指した[13]。ナツメヤシの実が房なりになるため豊穣・多産と関係づけられただけでなく、このような地母神との強いつながりは、実の熟す8月頃が収穫期であることも関係しているかもしれない。というのも、この時期が黄道12星座の乙女座にあたるからである。「生活カレンダー」ともいえる黄道12星座のなかで地母神が司る月(乙女座)は、当初は7月21日頃から8月20頃であった[14]。

カル・ツクルティ・ニヌルタの壁画(前13世紀)[15]には、簡略化した表現によって意匠化されたナツメヤシとそれを取り巻くパルメット文のほか、ナツメヤシを挟んで対称をなす二頭の羊が描かれている。このように、ナツメヤシを聖樹として中心に置き、その左右に動物・怪獣を対称的に配した図像は多い。ハダトゥ(アルスラン・タシュ)から出土した前8世紀の象牙細工(アレッポ博物館蔵)[16]では、二頭の向かい合った雄羊の頭をもつ有翼のライオンの中心と両端にナツメヤシを配し、ジヴィエから出土した前7世紀末の金製胸当て(個人蔵、メトロポリタン博物館、テヘラン考古博物館ほか蔵)[17]では、ナツメヤシ樹を挟んでラマッス、グリフィン、スフィンクスなどの空想獣や、アッシリアの有翼の精霊が描かれている。さらに、アケメネス朝のクセルクセス3世墓や後代の織物などにもみられる。

ユダヤ世界

同様の図像がユダヤ世界にもあったことが聖書の記述からわかる。旧約聖書「列王」(上6, 29-35)によれば、ユダヤのソロモン王は主のための神殿を建て、その至聖所の内外の壁と、本殿入口と拝殿入口の扉にそれぞれ2頭のケルビムとその間にたつナツメヤシとを刻ませ、金をかぶせたという。「創世記」(3, 24)でも、ケルビムはエデンの園の中央にある「生命の樹」を守るため、園の東入口に配備されている。これは、古い歴史を持つ生命の樹の象徴観念を利用したもので、主神ヤハウェの栄光を示すためであったと考えられている[18]。またこの神殿の大きな部屋は黄金に覆われた糸杉材の化粧張りによって荘厳されていたが、この化粧張りにもナツメヤシと鎖状の網目模様の浮彫が施されていた(同「歴代誌」下3, 5)。これは神を信じない者や神に逆らう者が踏み越えてはならない聖なる仕切を示しているという[19]。いずれにせよ、ナツメヤシ樹が神殿というもの、あるいは神域というものと深く結びついていたことを示している。同じようなことがパルミュラにもみられる[20]。ベール神殿の正面破風浮彫に表された奉献の儀式場面の傍らに、やはり大きな実の房をつけたナツメヤシが描かれている。聖書には、このほかにも、「心正しき者はナツメヤシの樹のように茂る」(同「詩編」92, 13〔12〕)、神の智恵は「カデシュのナツメヤシ[21]のように・・・高く大きく育った」(シラの書24, 14)などとある。また、聖母マリアは「あなたの立ち姿はナツメヤシ」(雅歌7)と謡われ、キリスト教徒は「処女マリア」に、ターマリー(聖なるナツメヤシ)の添え名を与えたという[22]。処女マリアが地母神的性格をもつ以上、この添え名をもつのは自然であろう。

アッシリア

アッシリアにも、カラフ出土の浮彫(図4)[23]のように、聖樹として描かれたものがある。聖樹崇拝を表したこの浮彫では、幹に山形文を表し、上下に積み重ねたような装飾化の進んだナツメヤシの樹を中央におき、その周囲にはパルメット文を繋いで連続文としている。その葉の形を見ると、パルメット文が

ナツメヤシの樹冠文であることがわかる。このように、聖樹を挟んで王と有翼の精霊とがそれぞれ対称するように配置された図像は、アッシリアで繰り返し描かれた。有翼の精霊(別の浮彫では、猛禽の頭をした有翼の精霊になっているものもある)の左手に取っ手のある桶、挙げた右手には松かさ状のものがみえる。実を収穫しているとも、聖水を集めているともいわれるが、ナツメヤシが雌雄異株であること、この図に実の表現がないことを考えると、受粉場面あるいはむしろ後述のようにこれを雄株とみて花粉採取の場面ではないかと思われる[24]。

中央の聖樹上方には太陽神シャマシュを表す。太陽神とナツメヤシの関係も強かったようである。シッパル出土の浮彫(前9世紀、大英博物館蔵)[25]では、ナツメヤシの樹がシャマシュ神の「宮殿」の天蓋正面を支えており、古代ギリシア神話においても、レトが太陽神アポロンを生んだのはデロス島のナツメヤシのもとであったともいわれ[26]、この樹はアポロンに捧げられて聖樹となり光の象徴となっている。また、後述のように、パルミュラのマラクベールとも関係が深い。

さらに、バビロンにあったネブカドネザル2世の南宮殿謁見の間正面玄関を飾る釉薬レンガ浮彫装飾(前6世紀前半、ベルリン・ペルガモン美術館)[27]には意匠化した4本のナツメヤシとパルメット文が表されていた。ナツメヤシと王権との関わりもはっきり示されている。この樹も、上述の聖樹と同じく実の表現がなく、雄株を表そうとしたものかもしれない。というのも、この樹を男根の象徴と見ているものがあるからである。その名が「ナツメヤシの国」を意味するフェニキアの神バール・ペオルは、男根神として2つの大きな石の間のナツメヤシの樹によって象徴され[28]、エジプトでは、男根が「ナツメヤシの樹」と呼ばれていたという[29]。

ペルシア時代

テーベから出土した「ダリウスの獅子狩り」を表した円筒印章(前6－5世紀、大英博物館蔵)[30]にナツメヤシ樹が「枠」のように表されているもののほか、王朝が誇ったペルセポリスのアパダーナ正面階段部分などを様式化の進んだナツメヤシ樹が飾っている。また、このペルセポリスの脇の丘に穿たれたアルタクセルクセス3世の墳墓では、中段の最上部中央にナツメヤシを刻み、これを挟んで両側にライオンが向かい合うように縦列に並んでいる[31]。アルタクセルクセス2世の墳墓にも同様の図が描かれているが、その中心にこの樹があるかどうか図版からは判じがたい。これらはオリエントの伝統を受け継ぐものであるが、上記の円筒印章をのぞけば、かなり装飾的であり、表現例も少なく、これまで見たような強い象徴性は感じられない。おそらく、宗教の違いによるだけでなく、気候風土が異なることにより、ナツメヤシ文化と直接関わっていなかったからと思われる。

前300年頃の小アジアのエペソス、キュレネ、そしてクレタ島などでナツメヤシ樹を刻したコインが発行されている[32]。

2．パルメット

パルメットは建築物を飾るフリーズ装飾として、オリエント世界だけでなく遠くインドの地にも広まっている。アケメネス朝文化を取り入れたマウリア王朝時代の遺物で、インド東部のパータリプトラ址から出土した柱頭(前4-3世紀)はパルメットそのものとなっている。また、インド中部のサーンチーに残る第1ストゥーパの北塔門側柱(1世紀初頭)などにもパルメット文が見られる。このような建築装飾としてだけでなく、器物の装飾としても多く用いられた。ペルセポリスの浮彫(前6－5世紀)[33]に描かれた王の側近の吊した短剣のように、ロータスと組み合わされて鞘を縁取る装飾としても用いられている。

3．ナツメヤシの葉

葉は羽根状の形をし、左右対照的に「切れ込み」がある。ほかの樹木の小枝と判別しがたいものもあ

るが、「切れ込み」が細く一様であるのが特徴である。この葉の部分だけを描いたものや、神または人がこれを手にする図像がオリエント世界に多く見られる。スーサから出土した前４千年紀に属す「スーサⅠ」様式のゴブレットに、一筋の長い線の左右に対照的に短い線を幾筋も引いた図柄を表したものがいくつかある[34]。おそらく、ナツメヤシの葉の表現と思われる。ヘロドトスのいう「実から造られた酒」を捧げるか飲むための酒杯であったかもしれない。

テルロー出土のグデアの石版[35]では、ニンギシュジダ神に手を引かれてエンキ神の前に進み出るラガシュのグデアの手に一葉が握られている。両肩に有角の蛇頭をのぞかせるニンギシュジダは冥府の神であり、冥府の悪霊から守護してくれる神である。蛇は治療、すなわち死からの再生と関係が強く、エンキは冥府の鮮水の神で、新たな生命の創造に関わる[36]。これらのことから、この図像は永遠生へ生まれかわるという来世のことを表しているように見える。すなわち、この図におけるナツメヤシの葉が来世観に関わる何か重要な意味を担っていたと考えられる。ニンギシュジダという名前は「善樹の主」を意味しているようである[37]。このほかにも、ルリスタン出土(ザグロス山脈中の墓)の奉納ピン(前８－７世紀、ルーヴル美術館蔵)[38]にもナツメヤシを手にした人物が描かれている。

ギリシア・ローマ世界

上述のように、ナツメヤシはアポロンの聖樹であっただけでなく、女神ニケの聖樹でもあり、勝利を意味した(ニーケーとは「勝利」の意)。そこで、この葉で作られた輪や冠がオリンピックや古代ローマの拳闘・剣試合の勝者に与えられた。しかし、ニケはオリュムポスの神々を援けてティーターン神族と戦ったことによりゼウスに賞せられた女神であり[39]、敵のティーターンは、オリエントでいえばティアーマトとキング率いる魔物の一団にあたる。このオリュムポスの敵に対する勝利であることが重要である。このニケ(ローマのウィクトリア)とナツメヤシとの関係は強く、有翼のニケあるいはウィクトリアがナツメヤシの葉を手にする姿で表された。手元の図版で見る限りにおいては、この図像が初出するのは前265年頃のローマ・コインである[40]。この図像は好まれたようで、ヘレニズム世界に広がっている。クィンクティウス・フラミニヌスが前197年頃マケドニアで発行したスタテール金貨[41]、ポントスのミスラダテス６世エウパトール(前120-63)のコイン[42]、さらに、ヘレニズムの東方端に位置するギリシア人国家グレコ・バクトリア王国(前250-130頃)およびその流れを汲むインド・ギリシア王国(前160-後10頃)の発行したコインにも多く登場している[43]。ドゥラ・エウロポスでも、ローマ占領後の公衆浴場(Ｆ３)から出土した壁画(図６)などにみられる。一方、ササン朝ペルシアのモニュメントでは、タ－ク・イ・ブスターンの大洞正面上方にこのニケ・タイプの飛天が描かれているが、左手には葡萄ないし真珠を盛った金属碗をもっており[44]、ナツメヤシは登場しない。

マケドニアのフィリッポス２世(前359-336)はコインにナツメヤシの葉を手にした騎馬姿の自分を刻出させ[45]、グレコ・バクトリア王国とインド・ギリシア王国では、有翼のニケ像のほか、アンティマコス１世テオス(前185-170)のコイン裏に刻出されたポセイドン[46]をはじめとして、ゼウス[47]、ヘラクレス(図７)[48]、ディオスクーロイ[49]、アテナ[50]など、これまでナツメヤシと縁のなかった神々の手にもこの葉がもたされており、この東方の王国でナツメヤシの葉が象徴として重要な意味を担っていたことがうかがわれる。ニケを掌に載せて描かれることも多いゼウスがニケ(勝利)の象徴であるナツメヤシの葉をもつのは自然である。ヘラクレスは12功業の結果、カリニコス(勝利者)の称号をえた者であり、ディオスクーロイは死と再生に関係し、「治療者」にして、海を渡る者の救援者であり、やはり勝利とも関係づけられた神々である[51]。ポセイドンはあらゆる水の支配者で、ガイアフォクソス（大地の〔下を〕車を駆る者）と呼ばれていたことから[52]、おそらくこの神も再生と関わったと思われる。さらに、アテナは戦勝の女神である。これゆえ、これらの神はナツメヤシの葉と関係づけられたのであろう。

パルミュラのベール神殿出土の浮彫(後32年)[53]では、ヘラクレス、ヴィーナスーアタルガティスとともに描かれた月神アグリボールと太陽神ヤルヒボールの右手にこの葉が見える。太陽と月は一対となって死と再生を表した。同じベール神殿に、太陽(マラクベール)の一年のサイクルを表した浮彫(図８)[54]があるが、神殿を象徴すると思われる石柱の脇にナツメヤシの葉の表現がみられる。ここでもまた、死と再生(四季の循環)と神殿とにかかわっている。同じくパルミュラ出土の祭壇側面に施された浮彫(後１世紀)[55]では、ライオンを従えた大地母神アッラートの左手、ドゥラ・エウロポス出土のテュケ(またはパルミュラのガドゥ)女神を中心に描いた浮彫(159年)[56]ではウィクトリアの左手、同アフラド神殿出土の壁画[57]では鳥を象った彫像らしきものの上方に架けられたアーチ(神殿正面門？)の頂部および柱の上部にナツメヤシの葉が描かれており、礼拝者とみえる人物の手にも一葉描かれている。さらにパルミュラの墳墓から出土する被葬者の彫像では、人物の背後や手前に幕を描くものが多いが、その両端上部を留める装飾品のところにもこの葉が彫られている。

イラン世界

ナツメヤシの葉の表現となると、二大ペルシア帝国の遺物には見あたらないが、パルティア治世下にはいくつかこれを表したものがある。ヘレニズム嗜好の強かったパルティアでは、ヴォノネス１世(後7/8-12)のコイン裏にナツメヤシの葉を手にした有翼のテュケ[58]、オロデス２世(前57-37/36)貨などに[59]、王にナツメヤシの葉を授けるテュケがニケ・タイプの姿で刻出されている。さらにアッシュール(イラク)出土の墓碑(前89/88または後12/13年)[60]に浮き彫りされた男性(被葬者)の左手、ハトラ出土のサナトルク王像(1-２２世紀頃)の左手[61]にナツメヤシの葉が表されている。また、アッシュール出土の土器に刻された神像礼拝図では神の座の前に一葉、一人の礼拝者の両側に二葉がたてられている[62]。サナトルク王のそれもおそらく神への礼拝に関係すると思われる。このほかにも、ハトラ第１神殿出土の「三女性浮彫」(前2-後3世紀、イラク博物館蔵)[63]の二人の女性の手にも認められるなど、ナツメヤシの葉の表現はいくつかあるが、セム文化の強い帝国西部地域に多く、パルティアが受け入れたというよりは、土着の文化が表出したものと言えよう。

エジプト

永遠の生の象徴として葬儀にはナツメヤシの葉を携えて行列したり、棺やミイラの上に置いた[64]。ティグラネ墳墓の石棺を納めた壁龕奥壁には、ナツメヤシの葉を手にした者たちが描かれている。後２世紀以降のものという、エジプトにしては「新しい」ものであるが、この時代のアレクサンドリアは古い宗教が習合しつつあった時代で、この墳墓も古典的な方法を採っているという[65]。石棺を納めた龕があり、その壁に葬送儀礼や死後の世界に関する壁画が描かれている。あるものでは、向かい合った１対の有翼の神格と、同じように一対のおそらくアヌビスだと思われる山犬がおり、その中央に２葉のナツメヤシの葉を手にした人物(おそらく埋葬された故人)がおり、頭上には太陽を表す有翼の円盤が表されている。別の壁龕では、有翼の円盤下で１対のナツメヤシの葉を女神に捧げている故人、また別の壁龕では、有翼の円盤下で、ミイラとなった故人を守護する１対の女神(イシスとネプテュス)の手にもそれぞれ１対の葉が握られている(図９)[66]。さらに、おそらく墳墓のものと思われるコプトの浮彫(３世紀初頭)[67]に描かれた二人の男性もナツメヤシの葉を手にしている。

死者を冥界に送る儀式を司る神アヌビスはローマのカリギュラ帝(在位37-41)がカンポ・ディ・マルス(ローマ)に建立したイセウム(イシス神殿)の祭壇浮彫(図10)[68]にも姿を見せるが、ここでは左手に、壺とともにナツメヤシの葉をもって描かれている。さらに右手にカドケウス杖、足には翼のついたサンダルを履いており、まさしくプシコポンポスとしての姿を見せている[69]。

図１　ナツメヤシの樹冠部

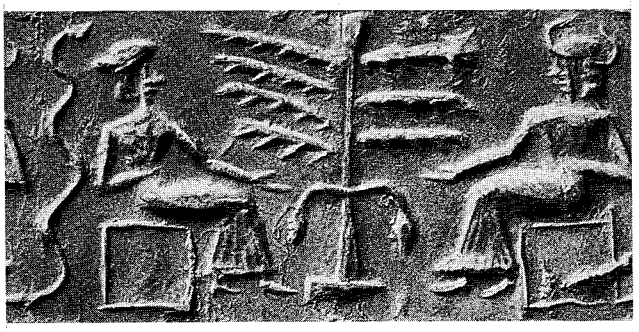


図２　「誘惑」と呼ばれる円筒印象の陰影
（前３千年紀中頃、大英博物館蔵）

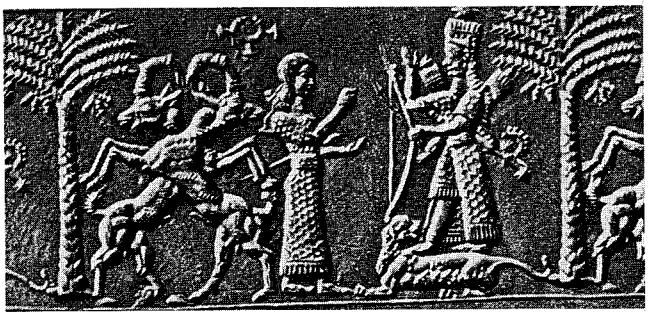


図３　イシュタル女神崇拝図
（前１千年紀初頭、大英博物館蔵）

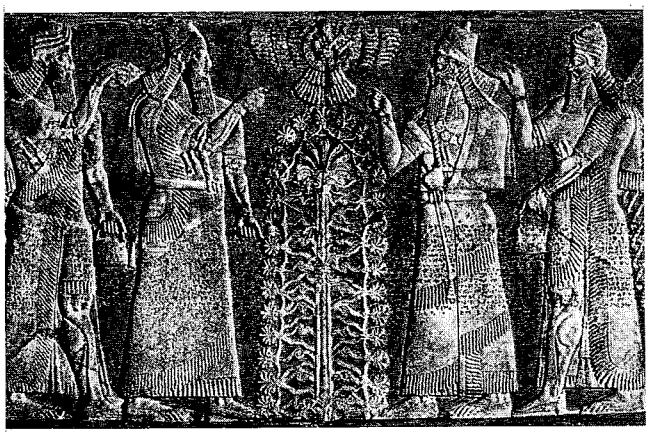


図４　聖樹崇拝
（カラフ出土、前９世紀、大英博物館蔵）

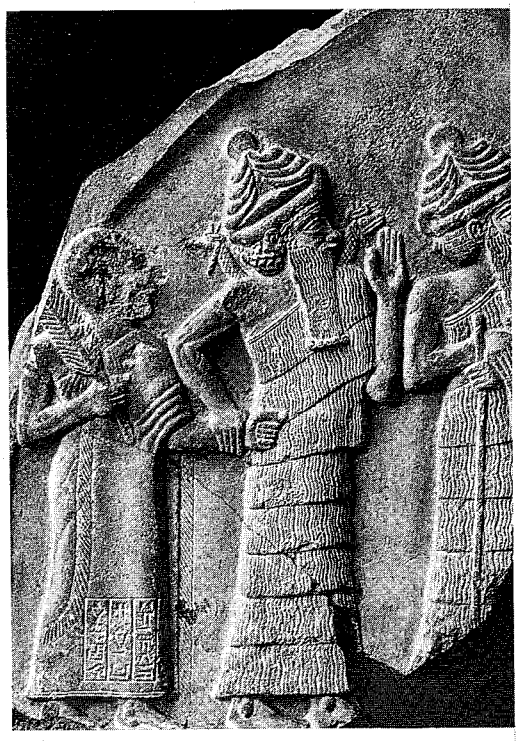
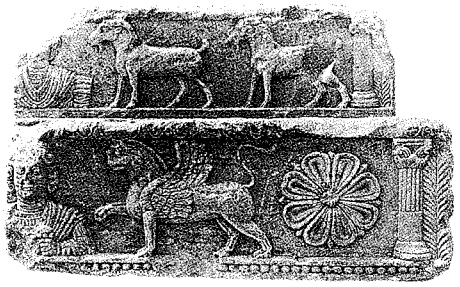


図５　グラテの石板
（テルロー出土、前２２世紀、ベルリン博物館蔵）

図6　ニケ
(ドゥラ・エウロボス出土、２世紀前半、
ダマスカス博物館蔵)

図7　ヘラクレス
(リュシアスの４ドラクマ貨、前１２０－１１０年頃)



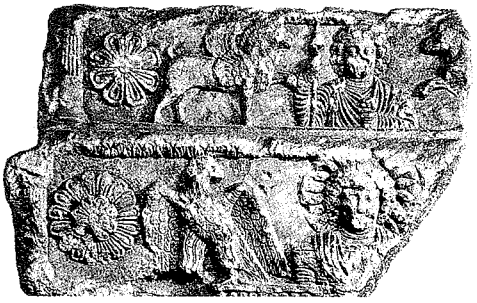


図８　マラクベールの「サイクル」を表した浮彫。(ベール神殿出土、左：ルーブル美術館蔵、右：パルミュラ博物館蔵)

図１０　イシス神殿祭壇のアヌビス
(１世紀中頃、カピトリーノ美術館蔵)

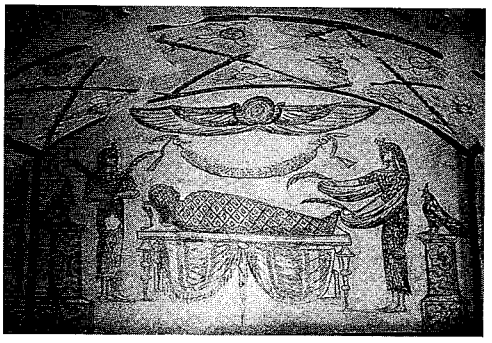


図９　ミイラを守護するイシスとネプテゥス
(ティグラネ墳墓壁龕、２世紀以降)

キリスト教

受難を前にしたイエスのエルサレム入城のとき民衆がナツメヤシの葉を道に敷いて、あるいは手にもって迎え、「ホサナ(万歳)」と叫んだという故事(『ヨハネの福音』第12章)から、この日を「枝の主日」(Dominica Palmarum復活祭前日の日曜日)と称し、この日にはナツメヤシの葉を手にもつことになっている。これは、その後カルヴァリーの丘で磔刑に処せられたキリストの復活を予示するものであった。すなわち、ここでのナツメヤシの葉は「死からの救済の象徴」であり、死の克服の象徴であった[70]。だからこそ、ホサナという語を発したのであろう。これはまさしく「勝利」を表している。キリスト教では、罪と死に対するキリスト教徒の「勝利」を意味し、それゆえ「殉教者」を表わす[71]。殉教者には魂が消え失せる前に天使がナツメヤシの葉を持ってくるとして、殉教を表わし、カタコンベの浮き彫り装飾などによく描かれた[72]。そして終末の日に救済されキリストの前に立つ人々はナツメヤシの葉を手にするといわれる(『ヨハネ黙示録』第7章)。

中世には、聖地巡礼を果たした徴としてナツメヤシの一葉を持ち帰ったという。ここから巡礼者は「椰子を持つ人」(palmer)と呼ばれるのであるが、おそらく巡礼によって神の国への生まれかわりが約束されたことを表したのであろう。

後代の聖人クリストフォルスの伝説話でも、ナツメヤシが重要な役割をしている。中世の聖者伝説集大成者ヤコブス・デ・フォラギネの『黄金伝説(レゲンダ・アウレア)』によれば、「この世の最高の主」に会うため、激しい川のほとりに住み、渡し守をしていたカナン(パレスティナ)出身の大男レプロブスは、ある夜、幼子に渡河を頼まれ、この子を肩に載せ、ナツメヤシの樹でできた太い棒を杖に川に入った。川は水量を増し、肩の子供は訛のように重くなったが、忍耐強く川を渡り、無事子どもを向こう岸へおろした。この子がキリストであり、彼のいうとおり、大地にさしたナツメヤシの棒に葉が茂り、花が咲き、実を結んでいた。これにより彼に帰依したのを境に名をクリストフォルス(「キリストを背負う者」の意)と改める。聖クリストフォルスは日々の生活における災いや不幸、生死における救難聖者として崇拝されたという[73]。この聖者像を遡ると、ギリシア正教やコプトのキリスト教などでは犬の頭をした人間で、左手に杖またはナツメヤシの葉をもった姿で表されていたという[74]。この姿も役割もアヌビスを思わせて、興味深い。

このようにしてみてくると、ナツメヤシの表現はこの樹ともっとも関係の深かったオリエントを中心にはじまり、ローマの文化を介して広まったように思われる。そしてその意味するところは豊穣のみならず、神殿あるいは神域、勝利、死の克服あるいは永遠生、王権(雄株の場合)であった。しかし、ここでいう勝利はたんに戦いにおける勝利ではなく、魔物に対する勝利、死に対する勝利などを意味しており、これにより、ナツメヤシは神の威厳・死の克服・(死後の)永遠生といったものを表した。したがって、ナツメヤシの葉を手にする神または王(あるいは王に相当する者)はこのような意味での勝利者であり、神の意向を受けたものであり、救済者である。

ローマ軍は征服地を行進するとき、ナツメヤシの葉を掲げた者に先導させたという。これはローマの勝利をかち誇るとともに、「ローマ支配による平和」の訪れを示すものであり、みずからを救済者として誇示したものといえよう。

そしてこの葉を手にする「人々」(被葬者を含む)は救済を望む者であり、救済を約束された者たちである。ナツメヤシの樹と葉は、人が手にできるか否かという点をのぞけば、意味に大きな違いはないようである。

主な参考文献

『アッシリア大文明展 ── 芸術と帝国』カタログ1996
新規矩男編『古代西アジア美術』<大系世界の美術2>学研 1975
植田重雄『守護聖者』<中公新書1047>中央公論社1992
B．ウォーカー『神話・伝承事典』(山下主一郎主幹) 大修館書店
旧約聖書『創世記』<岩波文庫>(関根正雄訳) 岩波書店
R．ギルシュマン『古代イランⅠ、ⅠⅠ』<人類の美術3, 4>(岡谷公二訳) 新潮社 1965, 1966
R．クック『生命の樹』<イメージの博物誌15>(植島啓二訳) 平凡社1982
R．グレーヴス『ギリシア神話』上巻 (高杉一郎訳) 紀伊国屋書店1962
高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』岩波書店 1960
K．ケレーニイ『ギリシアの神話 ── 神々の時代』<中公文庫 ケ21>(植田兼義訳) 中央公論社 1985
D．コロン『円筒印章』(久我行子訳) 東京美術1996
『シルクロード大文明展 ── シルクロード・オアシスと草原の道』カタログ
『新約聖書』(共同訳) <講談社学術文庫318>講談社1981
杉勇・三笠宮崇仁監修『古代オリエント集』<筑摩世界文学大系1>(後藤光一郎ほか訳) 筑摩書房 1978
『聖書』日本聖書協会1955
田辺勝美『平山郁夫コレクション シルクロードのコイン』シルクロード研究所1993
中沢樹「エデンの園の二つの樹」『日本オリエント学会創立２５周年記念オリエント学論集』刃水書房1979、497-515頁
── 「続・エデンの園の二つの樹」『日本オリエント学会創立３０周年記念オリエント学論集』刃水書房1984、483-498頁
A．パロ『シュメール』<人類の美術1>(青柳瑞穂・小野山節訳) 新潮社 1968
『アッシリア』<人類の美術2>(小野山節・中山公男訳) 新潮社 1965
深井晋司・田辺勝美『ペルシア美術史』吉川弘文館 1983
ヘロドトス『歴史』<岩波文庫33-405-1>(松平千秋訳) 岩波書店1971
前田龍彦「双子 (対なるもの)」『Oriente』18、古代オリエント博物館1998
増田精一『古代オリエント文明の源流』弥呂久1993
三笠宮崇仁編『古代オリエントの生活』<生活の世界歴史>河出書房新社 1991
水之江有一編『シンボル事典』北星堂書店 1985
M．ルルカー『聖書象徴事典』(池田紘一訳) 人文書院 1988
渡辺和子「聖なる空間の表象 ── 古代メソポタミアの『生命の木』」宮家準・小川英雄編『聖なる空間』<宗教史学論叢５>LITHON 1993、49-98頁
── 「古代メソポタミアにおける『生命の木』 ── 研究の現状とその問題点」『象徴図像研究』III、和光大学1989、84-98頁
Black, J., Green, A., *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia*, London 1992
Bopearachchi, O., *Monnaies greco-bactriannes et indo-grecques*, Paris 1991
Bopearachchi, O., ur-Rahman, A., *Pre-Kushana coins in Pakistan*, Karachi 1995
Champdor, A., *Les ruines de Palmyre*, Paris 1953
Colldge, M., *The Art of Palmyra*, London 1976
── *The Parthian Period*, Leiden 1986
Comte du Mesnil du Buisson, *Les tesseres et les monnaies de Palmyre*, Paris 1962
Cumont, F., *Fouilles de Doura-Europos (1922-1923)*, Paris 1926
Danthine, H., *Le palmier-dattier et les arbres sacrés dans l'iconographie de l'Asie occidentale ancienne*, Paris 1937
Davis, N., Kraay, C.M., *The Hellenistic Kingdoms*, London 1973.
Göbl, R., *Antike numismatik*, Band 2, Munchen 1978
Haag, M., *Alexandria*, Cairo 1993
Hopkins, C., *The discovery of Dura-Europos*, New Haven 1979
Landsberger, B., *The date palm and its by-products according to the cuneiform sources*, Graz 1967
Morkholm, O., *Early Hellenistic Coinage*, Cambridge 1991.
Perrot, N., *Les représentations de l'arbre sacré sur les monuments de Mésopotamie et d'Elam*, Paris 1937
Prieur, J., *Les animaux sacres dans l'antiquite*, Rennes 1988
Schmidt, E., *Persepolis* III, Chicago 1970
Will, E., *Les palmyréniens, La Venise des sable*, Paris 1992

註

1　平凡社『百科事典』「シュロ」参照
2　同『百科事典』「ナツメヤシ」参照
3　『ハンムラビ法典』第59－66条に、ナツメヤシ果樹園に関する条項。三笠宮崇仁編『古代オリエントの生活』生活の世界歴史、河出書房新社　1991年、67頁
4　例えば、葡萄の棚下で后と杯を交わしている場面背景(大英博物館蔵)。『シュメール』図20
5　『歴史』Ⅰ.193 (松平千秋訳、岩波文庫33-405-1、岩波書店1971参照)
6　「バビロンの新年祭」『古代オリエント集』<筑摩世界文学大系>１　後藤光一郎他訳　筑摩書房　1978年　200頁
7　『バビロニア神義論』40 (同『古代オリエント集』247頁)
8　『シュメール』図53
9　『シュメール』図346
10　前田龍彦「コンマゲネの<叙任図>をめぐって」『象徴図像研究』ⅠX、和光大学象徴図像研究会1995、30頁
11　増田精一、206頁
12　『アッシリア』図203
13　R. Graves, The White Goddess, New York 1958, p.197.　B．ウォーカー『神話・伝承事典』(山下主一郎主幹) 大修館書店 1988、６０８頁参照。訳には「シュロの木」とあるが、上述のように、おそらく「ナツメヤシ」の間違いであると思われる。
14　黄道12星座が確立したと考えられている前3000年頃、この月は収穫を表す麦の穂で表され、後に地母神が麦穂を手にする姿となった。前800年頃、黄道十二宮として再編されたときひと月のずれが生じ、いまにいたる。

15 『アッシリア』図７
16 『アッシリア』図326
17 『古代ペルシア１』図377－379
18 ルルカー「棗椰子」
19 ルルカー「棗椰子」
20 増田精一、213－218頁参照
21 共同訳、口語訳では「枝」となっている
22 R. Hughes, Heaven and Hell in Western Art, New York 1968, p.55.『神話・伝承事典』608頁参照。
23 『アッシリア』図16
24 『古代西アジア美術』77頁
25 『アッシリア』図213
26 K.ケレーニイ『ギリシアの神話－神々の時代』（植田兼義訳）＜中公文庫＞ケ21，中央公論社 1985年、161－162頁。本文には「しゅろ」とあるが、これもナツメヤシであったと思われる。
27 『アッシリア』図224、『古代西アジア美術』図46
28 『神話・伝承事典』608頁
29 E.A. Wallis Budge(trans.), Book of the Dead, New York1960, p.518.『神話・伝承事典』608頁参照。
30 『アッシリア』図261；『古代ペルシア１』図329
31 Schmidt, Persepolis III, Chicago 1970, pl. 71A, 75
32 O. Morkholm, no.566(エペソス)、no. 114(キュレネ)、no. 133(クレタ島)
33 『古代ペルシア Ⅰ』図289、『古代西アジア美術』図78
34 例えば、ルーヴル美術館蔵のもの。『シュメール』図78、79、『古代西アジア美術』図51参照
35 『シュメール』図284。同、図285も参照
36 前田龍彦「コンマゲネの＜叙任図＞をめぐって」（前出）30－31頁
37 J. Black, A. Green, Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia, British Museum Press, 1992, p.138.
38 『古代ペルシア Ⅰ』図491
39 『ギリシア・ローマ神話辞典』181頁
40 Gobl, no. 1403
41 Gobl, no. 692
42 Gobl, no. 867-869
43 アンティマコス１世、同２世(前160－155頃)、エウクラティデス１世(前170－145頃)、メナンドロス１世(前155－130頃)ほか。アンティマコス２世には、ナツメヤシの葉冠を表したものもある。
図版に関しては、O. Bopearachchi 参照
44 深井晋司・田辺勝美『ペルシア美術史』吉川弘文館 1983年、134頁
45 O. Morkholm, nos. 4, 70.
46 同書 pl. 10.
47 アミュンタス(前95－90頃)、Bopearachchi参照
48 アガトクレス(前190－180頃)、リュシアス(前120－110頃)、Bopearachchi参照
49 エウクラティデス１世、アンティアルキダス(前115－95頃)、ディオメデス(前95－90頃)、アルケビオス(前90－80頃)、Bopearachchi参照
50 メナンドロス２世(前90－85頃)、Bopearachchi参照
51 前田龍彦「ガンダーラ美術にみる、仏伝の中の５本の樹」『象徴図像研究』X、和光大学象徴図像研究会 1996、10－11頁
52 『ギリシア・ローマ神話辞典』261頁
53 M. Colldge, fig.36
54 M. Colldge, figs.13,14. 山羊は冬至に関係する。太陽を表した光背と「花」の大きさからいって、鷲のパネルが夏至、グリフィンが春分、秋分を表すと考えられるが、理論的には、グリフィンの大きい方が春分だといえる。
55 M. Colldge, fig.49
56 M. Colldge, fig.146. 増田精一は「オリーヴの小枝」とする（『オリエント古代文明の源流』212頁）
57 増田精一、図74参照
58 『古代イラン Ⅱ』図146、Gobl, no. 1951, 1987
59 Gobl, nos. 1978, 1979。ほかに、フラーテス４世(同 no. 1980)、ティリダテス(no. 1988-1991)、ヴォロガセス１世(no. 1996)など。
60 M. Colledge, The Parthian Period, Leiden 1986, pl. XXXVa
61『古代イラン２』図105、『シルクロード大文明展』「シルクロード・オアシスと草原の道」編、図版8
62 増田精一、図７５参照
63『シルクロード大文明展』「シルクロード・オアシスと草原の道」編、図版16
64 ルルカー、「棗椰子」
65 M. Haag, Alexandria, Cairo 1993, pp.28-31
66 同書pp.30-31参照
67 M. Colldge, fig.148
68 J. Prieur, Les animaux sacres dans l'antiquite, Rennes 1988, p.48
69 翼は冥界との間を行き来するためのものであり、カドケウス杖の蛇は「治療」すなわち死者の再生をも意味する
70 平凡社『百科事典』
71 水之江有一編『シンボル事典』北星堂書店 1985、「棕櫚」
72 植田重雄『守護聖者』＜中公新書＞1047、中央公論社1992年、5-10頁。本書には「棕櫚」とあるが、挿図はナツメヤシである。
73 同書10頁
74 同書14頁